

井戸水活用広がる

山形市内の小学校・市立病院：

扇状地の上に広がる山形市の市街地で、災害に備え豊かな井戸水を活用する動きが出ている。災害時には避難所となる市立西小小学校には28日、水道が断水しても手動で水がくめる「ぼうさい井戸」が完成。市立病院済生館は今春、あまり使っていなかった井戸に浄水装置を取り付け、地下水を上水道に使っている。



山形市立西小の「ぼうさい井戸」。手押し式だから停電時にも地下水をくむことができる。山形市西田3丁目

「万一を考慮して」

「意外に軽い、軽い」。西小小学校の校庭前に設置された井戸は、昔ながらの手押しポンプ式だ。ハンドルを軽く1回上下させるだけで1リットルの水が出てくる。井戸は深さ75センチまで掘ってあるが、扇状地の端に近い同小では地下水水位が高く、水は2・6センチ掘ったところが出たという。工事費は200万円。地



山形市立病院済生館の地下水浄化設備。病院で使用する水をすべてまかなえる。同市七日町1丁目

下水を使っている企業などをつくる「山形地域地下水利用対策協議会」（会長・鈴木隆一でん六社長）が、東日本大震災を受けて「いざというときに使える井戸が必要」と掘削し、この日、市に寄贈した。

飲料には不向きだが、普段は花の水やりなどに使い、非常時にはトイレや洗濯など生活用水にも活用する。協議会は6年前にも市立第四中学校に井戸を贈り、これで2基目になる。

一方、1日280トンの水を必要とする済生館は、災害で水道が断水した場合、「病院機能が維持できない」と、約4700万円

をかけて地下水の浄化設備を取り付けた。

活用したのは、敷地内にあった元造り酒屋の井戸。清酒の仕込み用に使われていた地下150センチの井戸水は「塩素殺菌しなくても飲めるくらい良質な水」（済生館管理課）で、1日280トンの水量がある。災害で停電しても、病院の自家発電機で必要量をくみ上げられるという。

済生館での地下水の活用は、経費の削減にもつながりそうだ。それまでは市上下水道部に月120万円の水道代を払ってきたが、4月からは水道の使用をほとんどやめたため、浄化装置の維持費など月30万円程度で済むという。

水を売る市上下水道部も水を買う済生館も、同じ市の機関で、地下水活用には遠慮もあつたようだが、「断水したら市が持っている2トンの給水車で水をピストン輸送しても間に合わない」ことから、事業化が認められた。

市環境課によると、市内には動力で地下水をくみ上げる井戸が現在801カ所あるという。（伊東大治）